

縮小社会研究会



第 6 回総会

時：2018年1月14日（日）、10：30-11：00

所：同志社大学 烏丸キャンパス 志高館 SK110 烏丸今出川交差点より北に500m、

地図：http://global-studies.doshisha.ac.jp/access_map/access_map.html

第 41 回研究会

縮小社会における農業など第一次産業の姿およびそこへの道程がテーマです。有機農業も地産地消も大切なことですが、それが全国的に農業の主流になるためにはどうすればいいか、さらに、これからの農業の姿を各方面での実践活動の報告をもとに考えたいと思います。

11:00-12:00 基調講演 **未来の農業にむけて** 佐藤洋一郎（人間文化研究機構／京都府立大和食文化研究センター）

「成長の限界」（ローマクラブ、1973）は人口増加が諸悪の根源で、食料生産の地球環境への負荷は人口減少によってしか果たしえないとしたが、最近人口減少が食料生産セクターでの人間活動の低下をもたらした結果のところ生産が低下し始めている。人口は増えても減っても問題である。さらに農地という生産手段は適当なく乱を受けなければ劣化するらしいこともわかってきた。獣害がその例である。しかも人口減少は生産のネットワークを寸断し、一人であらゆることをこなす力がますます必要になりつつある。農作業は言うに及ばず、「6次産業」のための加工や販売も、あるいは獣害対策用の仕掛けの製作や設置も自分でこなさなければならなくなる。

考古学者によると人口縮小の局面ではかなり普遍的に中心都市の衰退がみられる。今後東京一極集中にも陰りがみられるようになるだろう。普通に考えれば、消費地が衰退すれば生産もまた衰退する。農業の未来について様々な角度からの提言がある。最近はおそらく「スマート農業」に関する情報が多く、しかもその多くは、自分の手を汚さず「安全で安価、うまくて健康によい」食料を手に入れたい都市住民のエゴを見透かした「成長路線」堅持型のそれになっている。しかしそのようなことが可能だろうか。あるいは必要だろうか。

これからの時代必要なのは何でも自分でできる Generalist ではないだろうか。文字通り「百姓」になることがもともとめられているかのようだ。つまりより自立した食料生産システムの構築が求められるということだと思われる。あるいは「物質循環の環が小さくなる」と言い換えてもよい。地産地消に通ずる、小規模生産＝小規模消費社会の実現とそれに見合う農業の構築が必要だ。より具体的に言えば、流域圏くらいの地域を単位として（その意味では京都盆地は最適なモデルになるか？）、排せつ物や廃棄物を資源として地域で食料を生産するシステム作りが急がれる。

都市民としては、自らの食の生産に少しでも関与するライフスタイルを作りそれに加わる努力をしたい。食べるために、時間と頭と筋肉を使う生活のスタイルを構築したい。

（裏に続く）

13:00-13:45 人工林の現状から日本社会を考える 谷誠 (人間環境大学)

日本のスギヒノキ人工林は 1960 年頃に植えられたものが極端に多く、現在、収穫期を迎えている。しかるに、樹木は成長に 50 年程度を要する自然性をもつため、世紀を超えた長期計画に基づかなければ、林業利用や森林保全は成り立たない。本発表では、この樹木の自然性の観点から、日本社会がかかえる問題点を考えてみたい。

13:50-14:20 アートで田んぼ—芸術と農業について 河野博 (農業・アーティスト)

虚空に向かって放たれている文化芸術が、日々の食という生な領域と関る事はないだろうと言う常識が現代である。が、毎年訪れる季節に促されて、田植え前のたんぼで歌ってやがて 20 年、命を頂く、この非合理的な事柄が本来の食べ物だった。だからか、人類史では祭儀を伴わない農業は無かった。アマゾンの先住民はジャングルで採れる食べ物には魂があるが、焼畑で自ら作る食べ物には魂が無いと語る。だから人類は歌い踊った。つまり人々は芸術農業を営々と行ってきた。

14:25-14:55 食品工業副産物・粉碎タケのキノコ処理産物の飼料化および都市・農村連携による食料生産試案 北川政幸 (元京都大学農学研究科附属牧場教員) 昨春、定年退職しました京大附属牧場での研究・教育のとり組みと小農社会での食料生産試案について紹介したいと思います。

15:05-15:35 縮小社会における害獣利用の可能性 小川正嗣 (放送大学大学院生)

現在、シカやイノシシなどによる害獣被害が全国で相次いでおり、人間はそれを狩猟している。ところが狩猟された害獣は、そのほとんどが使われていない。まずはその現状を紹介し、多くの人と話題共有をしたい

15:40-16:10 省農薬ミカン園の 40 年間調査で学んだこと 石田紀郎 (農薬ゼミ、市民環境研究所) 1970 年に始まった省農薬ミカン園の病虫害発生と収量調査を 40 年間続けてきた。重要害虫のヤノネカイガラムシの天敵防除に成功し、農薬散布も慣行の 10 分の 1 程度である。収量も品質も安定し、毎年、完売してきた。

16:15-16:45 縮小社会に向けた農業の推進方法～ボトムアップアプローチ～ 長谷川浩 (日本有機農業学会理事、NPO法人福島県有機農業ネットワーク理事)、 1) 農業の新規参加者が、正当な価格を支払う少数派 (多分 5%以下) と直接つながる、2) 学校給食に無農薬、無添加の農産物等を導入して子供から親を変えさせる、3) すべての市民が耕すのが市民皆農、を進める方策について考察する。

16:50-17:05 『虹の邑・ポパイくん』の経営と農事法人の取り組み 長谷川義仁 (農業、自然食品会社と農事法人の経営)、 30 数年前から、有機農業と消費者との提携運動 (顔の見える関係) を模索してきた。しかし、形骸化し、商品経済の激流の中で飲み込まれ翻弄され、もがいているのが、現状である。そこで、今までの歴史を対象化することで、今後の運動のあり方を考えたい。

17:10-17:40 全体討論

懇親会 : 18 : 00-19 : 30 場所 : 芙蓉園 (烏丸今出川西入る)、費用 : 2000 円 (ドリンク別)

参加登録 : 下記の自動登録よりお願いします。 **参加費** : 会員は無料、非会員は 500 円

http://confreg.ate-mahoroba.jp/confreg?conf_idstr=9HLDgACGQgy3ioi7TeeBa0MP981